

信仰生活の提唱

現実

ある方の母について書かれたものを読んでみますと、世界の聖者・偉人・天才のほとんど大部分が、とても優れた母をその母に持つていることが語られていました。これはまことに事実でありましょう。優生学上の諸条件が極めて通常に具っており、その上よい母によつて育てられるほどの幸はあり得ません。

まことに全ての子が世にも優れた賢母を持ち、全ての母が後世に名を残すような子を持つことが出来れば問題はありますが、大地の現実はその裏切つて、大部分の母は平凡であり、時には平凡を通り越して愚かであり、劣悪であり、更に時には極悪であります。子供の多くもまた平凡であり、更に愚者であり、時には悪逆非道、病弱であります。

賢母に天才児、それはもとより求めらるべきことでありますが、しかしその千人に一人の恵まれた人のことよりも、我等の問題は、平凡以下の我等の悲しい現実の事実の問題であります。鬼か悪魔か、恐るべき毒婦を母に持つて、あたらし生を台なしに蹂躪ふみにじられて、暗い運命を抱いて泣いている子の涙も知っておりません。一生の努力をただ愛子の上に注ぎながら、その子が平凡以下であったり、病弱であったり、あるいは全く墮落の淵に沈んでしまつたりして、一生涙の乾きやまぬ母の訴えも聞きすぎました。

堂々たる男性の妻となつて一生幸福に過してゆきたいのは全ての女性の希望であり、若き日の美しき願ひであります。だが人生の現実はその許しません。病弱な夫、才能のない夫、教養のない野卑な男、放蕩兄、短気我慢な暴君、女の腐つたような意気地なし等々、大部分の女は全て若き日の期待を裏切られて、灰色の中に子どもを生んで、ただ生存を続けてゆく。

真実の夫婦は、必ず異体同心の愛に結ばれて生くべきであります。様々な事情が愛のない夫婦を作ります、別れることも出来ず、不満足のまま一生を過ぎゆく人もかなりあります。

世には「あなた百までわしや九十九まで、共に白髪の生えるまで」と偕老同穴の契もこまやかに、長生きした人もありますが、三十にも足らぬ若い身空で未亡人になり、子供をつれて赤手空拳、人生の荒波の中を苦闘しつづけている人もあります。

あるいは又、不具廃人になつた夫や、病床に横たわっている夫のために、生活戦線に進出している人もあります。

数えあげてゆけば限りのない悲しい現実の種々相の中に、人生の明るい希望も願ひも消えはてて、哀れ人生の敗残者として消えてゆく多くの不幸の人は、一体どうすればいいのでしょうか。

果して敗残者であるか

ここに三十五歳にして夫に死なれ、三人の子供をつれて奮闘し、長男が二十一歳になつた時、肺結核で倒れ、長女は二十歳の時、恋で走り、更に火事に出会つて丸焼け

になった婦人がありました。「私は人生の敗残者です。」婦人の眉の間には、暗い深い幾条かの皺が刻まれています。

私どもは、この至る所にくり返されるであろう所の事実をつかんで、考えて見たいと思います。人生の大海の大波小波は、はかり知ることの出来ない様々な波乱を描いて、永遠につきる日はありません。「生死の苦海ほとりなし」との親鸞聖人の断案はついに何をもつても打ち消すことが出来ません。今は幸福の頂きにいる人も、何時、人生苦の谷底に転落しなければならぬかも知れません。私どもは一体どんなに考えたらいいのでしょうか。

一、私は冷たい氷のような心になつてこんなことを考えて見ます。

人生は算盤そろばんで割り切れない処なのである。ここには一生を幸福に暮してゆく人もあり、一生を不幸に泣いてゆく人があり、前半生を不幸に後半生を幸福に、あるいは前半生を幸福に後半生を不幸におわる人があり、一生たいした波なく生きてゆく人、身分の高い人で泣いている人、身分が低い人で泣いている人、金があつて苦しむ者、無くて苦しむ人、あつて笑う人、何人かの博士に脈をとられて至れり尽くせりの特等の治療で若死する人もあれば、医者には二里も行かねば診察さえしてもらえない田舎でも、八十九まで生きる人、善人で不幸な人、悪人ではびこる者、悪人で亡ぶ者、善人で栄える者、大震災は地震博士にすら予告せずして来り、世界的大不景気の波が来てから世界の巨頭が経済会議を開き、人間が不作を嘆こうが雨が七月一ぱい降りつづけ、時には農林大臣が米価下落に困ろうが、全国中が豊年満作、物が多く生産されればされるほど民衆が買えなくなるような皮肉、これが嫌でもおうでも人生の真相であります。よい悪いをぬきにして、これが人生であり、当然おきることがおきているのです。そこで私はまずはつきりと、人生の生甲斐、人生の意義は、こうした波乱矛盾に満ちた人生の相なるが故に生れてくるのであることを、断言しておきます。

二、私どもは先にあげたような婦人に心から同情いたします。色々な不幸が一身に集つて人間的な幸福のほとんど全てが失われたことに真に心から同情いたします。けれども一面、私はこうした意味から、それは、しかし、その方の生き方によつて決して無意味ではなかつたと言つてもいいと思います。それは「大地の真相はこうなのだ」と人生の深さを認識された点であります。我らはしばしば「人生は享樂である」という考えを頭から持つて出発し、享樂した部分だけが私の人生における収獲であるように思う間違いをくり返します。真に知るべきことを知る、酔いも辛いも知りつくすことも、人間の出来る重要な要素であります。されば「我に七難八苦を与えたまえ」と祈つた人さえあると言います。

三、温室のような幸福の中で笑つた笑いは、決して真の笑いではなかつたのです。不幸のどん底に立ち上つて、その中に見出された微笑こそ、真の力によつて生れた光である。この不幸な御婦人が、この中に光を見出されて更生された時、必ず真の人生の光となり、多くの不幸の人の母となられることを信じます。

四、暗さが深ければ深いだけ、それを真の明るさにするためには、より深い光と力を要します。その光と力とを得られた時、不幸に比例して真の歓喜を得られるでありましょう。

人生の真の歓喜は、富と、名利と、権勢と、地位と、享樂とを生命にしている人には与えられないからであります。真人生を計る尺度は全く別のところにあるからであります。たとえ、刀折れ矢つきで哀れ人生の敗残者よ、と見える方にでも、必ず人生勝利の凱歌は許されなくてはなりません。しかしてその鍵を握るものが即ち宗教であります。

宗教生活の風光

親鸞聖人の宗教はいわゆる他力本願の宗教であります。苦、無常、罪惡等に苦しんでいる煩惱の衆生の上に、大樂、常住、清淨なる如来の本願力が活躍して、その絶対無限の力に生かされる大信心の世界であります。その金剛不壞の大信心は、如来の本願力そのものの顕現でありますから、他力本願の宗教だと申すのであります。しからば、その如来本願の宗教は我らの上にかなる救いの事実を成就するのであります。うか。

一、「その第一は「法悦の安住」であります。

過去に対する後悔と、未来に対する不安とを取り去られ、全我を如来の御はからいに乗托して、一切を投げ出し、まかせきつた生活であります。

親鸞聖人は、

「慶ばしい哉。心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。」

と言ひ、又

「大願海のうちには煩惱の波こそなかりけれ、

弘誓の船に乗りぬれば、大悲の風にまかせたり。」

「慈光はるかにかふらしめひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ 大安慰を帰命せよ。」

と歌嘆していられます。大安慰とは如来のことであります。如来の智慧光、慈悲光に照らされる時、真実の法喜を感じ、安らかさと慰めを得るのであります。まことに大信心においてのみ、法悦を、その法悦の中に安住の境地を見出すのであります。解脱、超越は如来大悲に安住する所に恵まれます。

二、次は、人生の意義の発見であります。

天地の間に存在するものは一木一草といえども、無意味無価値なものは存在せぬはずであります。しかるに、人は常に我が生活を無意味なものと感じます。歡樂の極にも悲哀があると申しますが、不幸や禍が続ぎ、失敗不平後悔などが押し寄せますと、三原山の御神火へでも走りたくなります。しかし、私どもが、人生を敬虔に考え、苦悩や矛盾の意味を見出しますと、宿命から使命へ、絶望から希望へ、愚痴からよろこ

びへ、と転じてゆきます。失われた意味、私の生存や、人生の現実の意味を発見するのが宗教であると言えます。つくった罪悪でも、つきせぬ苦悩でも、それが一度大信念のうちにとかされます時、それが持つ意味がはつきりします。

キリストの教えの中に、ある盲目の人に対して「この人が盲であるのは、親の因果のためでありますか、又は、この人の罪の報いでありますか。」と問うたのに答えて、「親の因果のためでも、罪の報いでもなく、実に神のみ栄えのあらわれんがためである。」と教えられたと聞きます。いかに多くの盲人がこのキリストの言葉によつて救われたことでありましょう。これキリストが盲目の上に意味を与えたのであります。誰にでも、その人でなくてはできないものがあり、役割があります。釈尊はいかなる愚人にも悪逆にも、人生の意味を法を通してお恵みになりました。もしこの人生の意義を忘れて暮すならば、単なる生存で一生をおわるでありましょう。

三、第三は、力の獲得であります。

信は力なりと申します。親鸞聖人は、

「念仏者は無碍の一道なり。」

と喝破されました。一切のものが障碍することが出来ない大道であります。如来の本願力……すでに力であります。よく人生の苦悩の中に生きる力を恵まれます。これを又「忍力」とも申します。忍ぶということは、まことに勝れた徳であることを釈尊は何時もお説きになりました。大地で生きようとすれば、絶対に「忍」の徳なくしては生きられません。その人が重要な位置に立てば立つほど、忍の徳なくしてはその4位置におれないようになっていくのが人生であります。苦の中で生きる態度はただ、この忍の一字につきまします。古来の聖者等、その御一生を拝すれば、忍力成就の一生であります。大聖釈尊こそ、その第一人者であります。精進努力の半面は忍であります。忍のない生涯とは、精進のない生涯のことです。

四、第四は、感謝の生活であります。

釈尊ほど物を尊ばれた方はありません。それはものの中に存在する絶対価値を見とどけられたからであります。「米一粒の重き須弥山よりも重し。」反口紙一枚をおし頂かれた聖者もあれば、菜つ葉一枚が流れ失せたのを追いかけた方もあります。如来の智慧が衆生の眼になりますと、今まで見えなかつた世界が見えてきます。物質が恵まれた分量に比例して感謝の心がわくと思つたらまちがいであります。飽くことなき貪欲心だけありますと、いかに金殿玉楼もお不足であり、智慧の眼が打ち開けば、荒屋あほぢやも時に瑠璃の御殿にまさります。信仰生活の態度は、一切に感謝してゆく生活態度であります。時には、非難攻撃、憤怒の人にすら感謝せずにはいられません。ましてや、如来の大慈悲に感謝の思いなくしてすみましようか。感謝の念は、直ちに報謝の念であり、生活であります。でありますから、聖人は和讃の巻頭に

「弥陀の名号となへつつ 信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり」

と高く掲げられました。報じても／＼報じつくせぬ所に信仰生活の真面目があり、真実の創造生活があります。よろこびがあります。権利義務でも末が通らず、腰かけでは実が入らず、請け負いでは手がぬぎたくなり、商売では儲けに眼がくらみ、逃げ腰では死んでおります。しよせん、恩に感じて我の全てを捧げ投げ出した時のみ、生きております。ここに至つてのみ、生活は真のよろこびとなります。

五。第五は転悪成善であり、転禍成楽であります。

いづれの宗教でも罪悪消滅を説かないものはありませんが、仏教でもまた罪障消滅を救済と言うのであります。その消滅について二つの意味があります。一つは、消滅とは無くすることである。即ち小乗の考え方であります。今一つは、消滅とは「転ずる」ということで、大乘仏教の考え方であります。転ずるとは「罪を善に転じかえなす」ということ、無くするのでなくて、罪悪さながら煩惱そのままが、善に徳に転ずるのであります。これ大乘の至極において沙汰されることであります。

「罪障功德の体となる 氷と水のごとくにて

こほりおほきに水おほしきはりおほきに徳おほし」

この御和讃など、最もよくこの世界を現わされてあります。

人は罪悪なくしては生きられませぬ。過去、現在、未来にわたつて因果の繩に縛られて、罪悪の中に苦しんでいます。しかるに如来金剛の信力は、この三世の罪悪に聖火と燃えて、悪を転じて徳とし、善とするのであります。

「渋柿のしぶこそよけれ、そのまゝに、変らで変る味の甘さよ。」

氷を水に転ずるものを熱と言ひ、糞を土に転ずるのが土であり、大海は衆悪の万川をそのままのんで清浄である如く、如来は衆生の煩惱を転じて仏とするのであります。罪悪は罪悪によつて亡びず、氷は水によつてとけない。罪悪に泣く人間はただ如来によつて聖化さるべきであります。

更に聖人は

「弥陀の願船に乗じて 光明の広海に浮びぬれば、

至徳の風静かにして 衆禍の波転ず。」

と断言されました。ただに罪悪を転ずるのみならず、すべての禍を感謝に法悦に懺悔に転ずるのであります。

私は大正十二年に一生の住み家と定めていた飯室の地を逃げねばならなくなりました。その時の騒動と言つたらまことに大変なことであり、私の苦難もまた、私の歴史としては特筆すべきものであります。私の一生の運命がくると向きを変えるほど打ちのめされた時は一本参りましたが、今日において考えますと、私が至る所で多くの勝友を恵まれて、まことに有難い生活をさせていただき、光明団の仕事も多少出てきましたのは、全くあの事件のおかげで、その時の主役となつて活躍して下さった方は、誰にも勝る一生かけての大恩人でありました。一生に二度とは無いような禍が、今日の幸福のもとになっております。みな善知識であり、如来の光明を輝きあらしめる善巧であります。聖人の御一生の如きは、禍から禍であります。あの苦悩の中に生いたつた信念なるが故に千古に輝くのであります。

私は多くの同胞たちが人間苦に悲泣していられることを知っています。しかし苦を真に生かし、禍を転じて大楽の風光を知らしめるものは、ただ宗教的信念であることを明確にお示しして、金剛不壊の大信念に住せられんことをお奨めするのであります。

女性と宗教

以上私の書きましたことはあまりに苦悩に対する生き方ばかりであつたようでありますけれども、宗教はただ苦悩に対してそれを超克してゆく力を与えるばかりではありません。私が私として真に生きてゆく道を与えられる所に真の宗教があるのであります。

私どもが私自身を真に知るといふことは、難しいと言えど至難なことはありません。じつと眼をつぶつて私自身へ帰つてゆく。「人が悪い人が悪い。」と言つて人を責めている時、何時しか一番悪いのは私であつたりします。

人間が他の動物より優れている点の一つに、この自己内省の世界があります。ですから動物ばなれのした文化人であればあるだけ、すぐれた人であればあるだけ、自己内省の深い人であります。

女性は男性よりもやさしく、特に感情において繊細であります。さらに体、顔、声色まで全てやさしく出来ています。けれども美しいものにはその裏に必ず醜いもの、おそろべきものが潜ませてあります。悪鬼のような心相、人の腸をえぐるような言動も女性において特に著しく見えるようであります。ですから「外面如菩薩 内心如夜叉」という言葉は女性に使われて来ました。もし女性がこの夜叉の如き内心の悪性を仏智の光によつて突き止めて、その上にそそがれる大慈悲の心に生きるならば、女性をはじめて女性本来の尊さを發揮するでありましょう。そしてその女性の優しさが、よき妻として、母として、更に社会人として、人類の上に光あらしめる存在となりましょう。宗教は徹底的に自身を知らしめないではおきませぬ。

感情は時に美しい。しかし感情は時に醜い。もし感情の背後に、明るい智慧の光、理性の眼がみ開かれてあるならば、感情は美しい春の花園をつくります。しかしもし感情がただ、その盲目的な流れのままに放たれてある時、恐るべき自滅の淵に自らを誘ひ、他の多くの人たちを殺します。愛もまた然りであります。愛は時に光であり、愛は時に暗であります。理性の光つていない、内省懺悔のない、なんら高められない愛は決して人生の光ではなくて、暗であります。女性は感情的だと言われます。そのこと自身は決して善でも悪でもありませんが、その感情の内奥には、常に光つているものがなくてはなりません。それは信念の光であり、明るい宗教的理性であり、智慧の眼であります。宗教的信念は智慧光そのものであります。

女性は人類の半分である以上、そして女性は弱いようでも、結局、柔よく剛を制するものである以上、男性を背後から動かしつつ、人類全体の上に大きなものを成就し、あるいは破壊してゆきます。もし以上申し上げたような生活者でない時、女性は夫の重荷となり、家庭の癌となり、社会の暗の中心となりましょう。

さらに女性の欠点は確固不動の意志の失われ易いことであります。自らの意志、強い底面を持った意志によつて自ら導かないで、ただその場の感情に流されてゆく時、待つているものは底知れぬ暗であります。自らの意志に立ちあがつて歩むのでなければ、貴女の一生はついに救われる時はないであります。宗教は我らに金剛不壊の大信念を成就いたします。この金剛の大信念に安住して、自らを感情の混乱から救い、強い意志によつて自ら立ちあがつて歩む所のみ、道は開けるのであります。

我らは至る所に、以上申しあげたような、真の宗教的生活三昧に入つて生きぬいて
いる女性を知っています。私は多くの女性が、觀世音菩薩の示現のような聖容をもつて社会に光つて下さらんことを切念して、ペンをおくものであります。